



日本の3つ星：飛驒

一橋大学大学院
客員教授

佐々木清隆

小生は3回延べ10年弱海外(パリに2度6年半、ワシントンD.C.に3年)勤務したことから海外が好きだと思われる。しかし弱冠28歳での飛驒・高山税務署長の経験が人生に大きな影響を与えたことは知られていない。当時の大蔵省秘書課企画官から赴任先の内示で、「お前はパリ、パリと言ってうるさいから、一度日本の良い所を見てこい」と言われた意味をその後痛感している。

税務行政は全く素人であったが、赴任した1989年(平成元年)は消費税が導入された直後で消費税の定着が最大の課題であった。特にそれまで税と縁のなかった消費者や児童生徒に対する「租税教育」の実施が各税務署に求められた。専門的な税務の話は無理としてもわかりやすく税の話をするならむしろ素人署長の出番である。本州一広い管内20市町村(当時)に100弱の小中高校があったが、1年間で40近い小中高校で租税教室を開催できた。中でも人口1,000人弱の村の小学校の分校で全校合わせて5人に昔の寺子屋のような教室で実施した経験は忘れがたい。授業の中で「税金で作られたものは何がある？」と生徒に対する質問への回答に備えるため、各市町村役場から教えてもらったことも地元を理解するうえで参考になった。

また小京都と評される古い町並み、春秋の高山祭りのほか各地での祭り等飛驒は歴史と伝統あふれる素晴らしい土地である。美味しい水と冬の厳しい寒さの中で仕込まれる日本酒の造り酒屋も多

数あり、冷酒に開眼させられた。フランスの地方でフランス料理と地元ワインを味わうのもよいが、飛驒の温泉に入った後に地元の食材を生かした和食と

冷酒を味わうのも格別である。フランスに住んだ経験からは、「(観光地の星付けをする)ミシュランのグリーンガイドブックがあったなら飛驒は3つ星間違いなし」と当時地元の方々に話していた。その後合掌造りで有名な白川郷が世界遺産に指定されたほか、コロナ禍前は多くの海外観光客でにぎわっていた。

その後再びパリに勤務し現地で長男が生まれ、飛驒への恩返しのつもりで飛驒の「飛」を名前の一字として使わせていただいている。日本に戻って後も定期的に家族で飛驒を訪れていたが、この10年余り訪問する機会がない。2019年に金融庁退官後久しぶりに飛驒に行こうと考えていたところに2年前からのコロナ禍でまだ実現していない。その分、御茶ノ水で美味しい飛驒料理と飛驒の酒を出す居酒屋で飲みながら飛驒を訪問する日を楽しみにしている。

